

メトロポリタン美術館

Metropolitan Museum of Art (THE MET)



美術館正面は、五番街に面している

メトロポリタン美術館(ザ・メット)は、ルーブルやエルミタージュとともに、世界の三大美術館に数えられる。何が三大なのかわからないが、その規模が大きいことは確かだ。コレクションは絵画や彫刻を始め、家具や楽器に至るまで 300 万点にも及ぶ。グッゲンハイム美術館に近い 5 番街のミュージアム・マイルにあるが、通りに面する幅が 300m、奥行きが 150 m もある巨大な建物となっている。敷地はセントラル・パークの一角を占め、ここには高層ビルは建たないので、地下 1 階、地上 2 階の三層を基本とした平面となっている。正面玄関を含む建物の中核の部分は、20 世紀の初めに造られて百年以上の歴史がある。そして収蔵品の増加とともに、周囲に増築する形で現在の形となったようだ。

ネーデルラント絵画も充実

初めてこの巨大な百貨店のような建物を訪問したのは、1981 年の夏だった。その中心は、西洋美術の収蔵品だったので、目当てにしていたのは、ヨーロッパ絵画の一画だった。そこに『麦刈り(穀物の収穫)』と呼ばれるピーテル＝ブリューゲルの作品が飾ってあった。当時、中野孝次氏の『ブリューゲルへの旅』というエッセイを読んでいた私は、その中にこの『麦刈り』も取り上げられていたので、是非本物をと言うことでこの絵の前に立った。ブリューゲルの作品に共通する、温かみのある暖色を多用した作品で、熟した麦畑の光景なので、茶系統の中間色に染められた構図だった。

農民画家と呼ばれたブリューゲルは、16 世紀にネーデルラント南部(現ベルギー)に生まれた人だが、イタリア修行から帰国してブラッセル近郊のブラバント地方に居を移してから、文字通り農村を舞台にした風景画を描き始めた。それまでの宗教画中心のヨーロッパ絵画に、

人と自然を対象としたネーデルラント絵画が現れたのだ。ネーデルラントの風景画は自分のお気に入りなので、私はこれが掛かっている部屋に長くいたのを覚えている。おなじみのフェルメール、『信仰の寓意』なる作品も……。余計な点景に焦点は当てず、純粹に風景の美と趣きを追及したヤコブ＝ロイスダールの絵画にもお目にかかった。ネーデルラント絵画の蒐集は、かつてのニューヨーク市がネーデルラント領ニューアムステルダムであり、今もオランダ系住民が上層市民に多いこととも関係があるかもしれない。

アメリカン・ウィング

1991年春に10年ぶりにニューヨーク市を訪ねた時も、この壮大な美術館を訪ねた。折しもソヴィエト連邦レニングラード市のエルミタージュ美術館から、ドイツ・ロマン派のフリードリヒ等の作品が借り出され展覧中だった。米ソ冷戦が終わったために実現した企画だったが、そのソ連もレニングラードもこの年のうちに消え、それぞれロシアとサンクト・ペテルブルクへと改称された。この頃そして今も尚と云うべきか、ドイツ・ロマン派のこの画家の作品を追っている私には、大変幸運でまた偶然の出来事だった。

ところで、この時の目当ては、館内の北西部を占めるアメリカン・ウィングと呼ばれる一画。文字通り、この広大な領土と多数の国民を擁するアメリカで、どんな絵画が生まれたか？ その一端を知るギャラリーだった。ニューヨークには、グッゲンハイムやMOMAなど、現代美術の中心と云うべき施設がある。しかし、二百年と日は浅いが、アメリカ絵画には古典的な写実絵画の伝統も息づいている。このウィングで気に入ったのが、一つはハドソン・リヴァー一派に代表される風景画。先のドイツ・ロマン派にも影響を受けたと云う英国生まれのトマス・コールはアメリカの自然に親しみ、ニューヨークに注ぐ大河ハドソン川を遡上。そこに都会にはない豊かな自然を見出した。上流の西側を占めるキャッツキルやアディロンダック山塊に分け入り風景画を描いた。19世紀前半のことだ。



トマス・コール『キャッツキルの眺め—初秋の頃—』

リヴァー派の第二世代は、コールの弟子だったフレデリック・チャーチらだ。19世紀の内陸への鉄道の拡張などによって彼らの取材はさらに広がり、チャーチはあのナイアガラ瀑布をスペクタクル満点な筆致で描いている。そして彼らが活躍した19世紀後半、メトロポリタン美術館の礎ができた。この美術館の設立には、チャーチたちリヴァー派の画家も参画していたそうだ。

もう一つアメリカン・ウィングではどうしても見ておきたい絵画があった。それはとてつもなく大きな絵画だった。ドイツ系アメリカ人のエマニュエル・ロイツェが描いた『デラウェア河を渡るワシントン』である。風景画のジャンルでも、19世紀後半には絵画の大判化が進んだが、それに対抗するように歴史画の分野にも広がった。ウィング2階中央の部屋の正面に、この絵は掛かっている。横約6.5m、縦3.75mもの巨大な作品だ。独立戦争中の1776年の冬、ペンシルヴェニアに退避していたアメリカ軍を率いて、ワシントン将軍が州境の河を強行突破、ニュージャージー側にいた英軍の雇い兵を急襲して勝利したという英雄的行為を理想化したものだ。歴史画にしては、川に氷が張っていたか？と疑われたり、当時まだ制定されていなかった米国旗が用いられたり、不正確さは否めないが、とにかくこの大きさには圧倒された……。



エマニュエル・ロイツェ『デラウェア河を渡るワシントン』

日本美術のギャラリー

さて、その次に向かったのが、アジア美術のコーナー。日本ギャラリーは、光を落とし、つくばいの水音が響く落ち着いたインテリアだった。そこに見事な無垢の木材を磨いた長椅子が置いてあった。ビデオからは、作者であるジョージ・ナカシマの木にこだわった創作動

機が語られていた。要は、木で家具を作ると言うことは、成長する生物としての樹木と対話する作業なのだ、とナカシマは語っていた。日系アメリカ人だが、樹木と共に生きて来た日本人の自然観をよく理解し、その造形に取り入れている作家だった。この時の旅ではその後半、ナカシマが工房を構えていたペンシルヴェニアの田舎にまで出かけることになった。※1

さて、常設展示ではなかったため見て来られなかったが、日本美術としては、琳派の蒐集(しゅうしゅう)が有名らしく、尾形光琳の『八橋図屏風』一雙もそのコレクションにあるそうだ。琳派の祖である光琳の作品はどれを見てもその端正な趣に心魅かれる人が多いと思う。この作品も同様だが、不思議なのは、あやめの花咲く水辺を見下ろすアングルで描かれているが、その池に渡された細長い木橋は真上から見たように平板に描かれている点だ。写実性と、それとは相いれぬ様式美が混在している作品だった。せっかくだからと、同僚への土産にこの作品のポスターをミュージアムショップで購入した。



尾形光琳 八橋図屏風

その他のギャラリー他

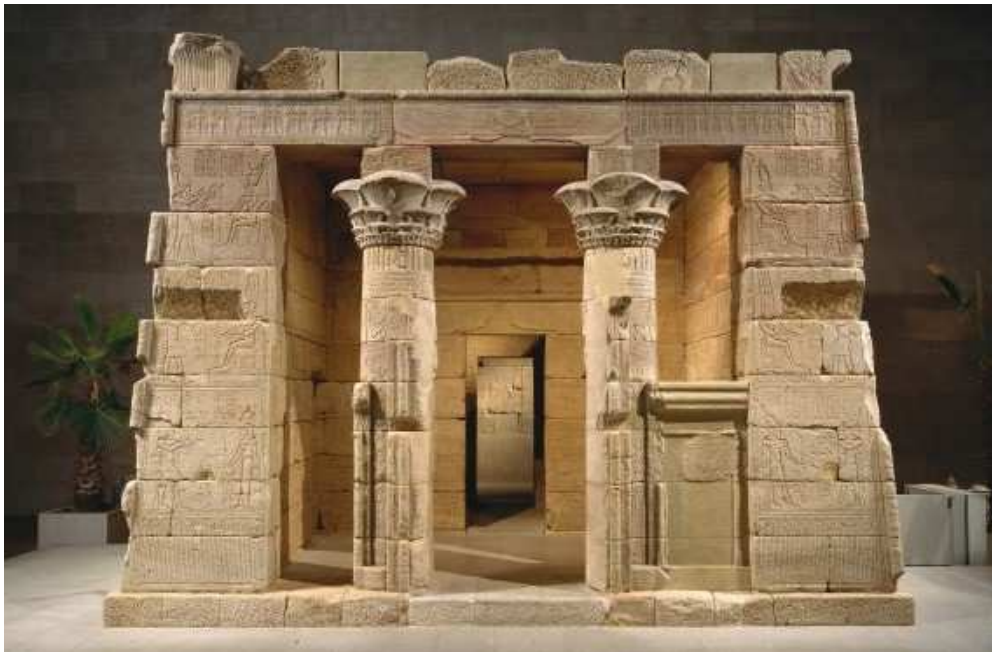
2001年12月末、同時テロ後のニューヨークを訪問した際にも、ザ・メットを訪問した。

1階の中央奥には、金融業で成功したロバート・リーマンの西洋美術のコレクションが、ガラスの大屋根(アトリウム)の下に収められている。急に明るい庭にでも出たのかと見ると、実際は温室の様な建物内で、そこに絵画だけでなく、グレコ・ローマン様式の彫像などが置かれていた。贅沢なコレクションだった。ロバートが生きた20世紀中頃までの金融会社『リーマン・ブラザース』は順調な業績を上げたが、80年代にはアメリカン・エクスプレス社に一度は身売りし、その後また独立したがご存知の通りサブプライム・ローンの焦げ付きで破綻し、2008年に世界を震撼させたリーマン・ショックを引き起こした。リーマン社は跡形もなくなったが、ロバートの蒐集した2500点以上のコレクションは、今もこの一面で入館者を惹(ひ)き付けている。

ニューヨーク市は、日本で言えば青森市近辺に当たる高緯度で、とにかく冬は寒い。年末

の厳しい寒さの中、この暖かい館内を歩き回るとは快適な経験でもあった。金曜日 28 日の午後から入館したが、気がついて見ると日が暮れた時間になっていた。それでも、この巨大な美術館では灯りが落ちない。金土は午後 8 時 45 分までの夜間開館が行われていた。

何でもありのザ・メットには、その北側にも大きなガラス屋根に覆われた一画があり、そこに何と古代エジプトの神殿の一部がそのまま移築され公開されている。デンドゥール神殿と呼ばれる建物で、エジプトと言っても古代ローマ時代に皇帝アウグストゥスがナイル川の上流、ヌビアの地に建てさせた物で、ローマ滅亡後は久しくキリスト教会として使われていたそうだ。それが 1960 年代、アスワン・ハイダム建設の際、水没することになり、エジプト政府から提供を受け、この美術館に収められることになった。



移築して再建されたデンドゥール神殿

この神殿の建物の周りを歩いた時、ガラス越しに見られるはずのセントラルパークの緑は夜の闇に覆われ、屋内の照明も控えめで暗く、その上目に見える範囲に入館者が 1 人もいなかった。その不思議な雰囲気、何となく怖れを感じた。建物の前面には、それを囲むように水が流れる大きな方形の池があり、砂漠の地にあつたこの建物とのコントラストが独特だった。

2022 年の春、東京の国立新美術館では、このメトロポリタン美術館の西洋絵画コレクションを展示する特別展が開催されている。**※2** 先日私自身も見学に出かけた。その際知ったのは、これらの作品が常設展示されるザ・メット 2 階の中央のギャラリーは今閉鎖され、天井を穿ってガラスの天窗を大規模に構築する工事中なのだそうだ。その工事あつての海外巡回だと聞いた。グッゲンハイム美術館の所でも取り上げたが、作品の鑑賞には自然光がふさわしい。メットもそのために、天井の光を取り入れるよう改築を重ねているようだ。こうした工夫が施された室内空間は、厳しい寒さの冬日などにメットを訪れば、さぞかし居心地よいものになるだろう。実際、年末の一日、美術館の中を歩き回り、その暖かさと明るさを体験した。これからも楽しみだ・・・。

最後に、1階中央の右側を占める大きなミュージアム・ショップについて。

これはいかにもアメリカ的で、収蔵作品に関連付けた多種多様なグッズを見かけた。もちろん分厚い美術全集や画集の類も本棚に並んでいた。小物では、ザ・メットのサインが入ったマグカップなども置いてあった。こうしたメットの商業路線は、海を越えて日本の新宿の百貨店にも、メットストアを進出させた。90年代のことである。当時、日本のご婦人方が、THE MET と書かれたビニール製だったと思うが、手提げバッグを持つのがちょっとしたトレンドになったことを覚えている・・・。

※1 このホームページ、日本の街、世界の地域 28 にあるペンシルヴェニア東部を参照してください。

※2 今回のメトロポリタン美術館展は、東京六本木の国立新美術館で 2022 年 5 月 30 日、月曜まで開催中。

メモランダム 以下は現在のデータです。

公式サイトは、www.metmuseum.org です。

住所は、

1000 5th avenue, 82street, New York, NY

5 番街の 80 丁目から 84 丁目の間を占める。

最寄り駅は、メトロ 4・5・6 号線の 86street 駅

地上に出て 86street を西へ。5 番街にぶつ

かったら南へ。徒歩 10 分。

水曜は休館。日月火と木は 10 時～17 時。金土は、

10 時～21 時。

入場料は、会員無料。一般 25 ドル。シニア 17 ドル。